行田いきいき委員会　先進地視察バスツアー（第３回市民公益活動推進委員会）実施報告

日時：平成２４年５月２４日（木）
午前８時４５分～午後５時

【参加者】　園田佳代子委員、塚本信夫委員、齋藤貴美子委員、徳重總章委員
中村博行委員（代理：福田又造氏）、田尻要委員、矢本政子委員、
長澤理香オブザーバー（関東経済産業局）、中島功次郎氏（関東経済産業局）、
事務局（地域づくり支援課）　浪江美穂課長、吉田兼弘主査、市川諭主事

【概　要】
午前８時４５分～
●バス車内で、各委員よりプロフィールカードを基に自己紹介

午前１０時～１１時３０分
●宮代町市民活動サポートセンター
宮代町役場会議室及び市民活動サポートセンターにて
指定管理者：ＮＰＯ法人ＭＣＡサポートセンター　渡辺朋子氏
宮代町総務政策課協働推進室長グループ室長　小暮正代氏
センター設立経緯から活動内容について説明を受けた後、市民活動サポートセンターを視察。
概要については、次のとおり。
・従来は市民活動というより、憩いの場であったが、業務委託されたことにより、市民に集まってもらえるよう企画するようになった。
・サービスの提供よりも、「市民がやりたいこと」を仕組みにしていくことを心掛けている。
・「自分だけがよければいい」ではなく、「人を幸せにする活動」を支援している。
・どうすれば登録しやすいかを考え、登録する際には、ただ登録シートに記入してもらうだけではなく、コミュニケーションをとりながら記入をしてもらっている。
・団体同士のみではなかなか交流が出来ていないため、スタッフが声を掛けて交流を持てるようにしている。
・まちほめ学会というのを作って、自分目線での町のいいところを褒めようという活動をしている。内容は、宮代のよさを知って、発信するためのものである。
今後は、
・スタッフだけではなく、活動団体もスタッフになれるような仕組みを考えている。
・運営委員会等で、情報公開できる場を作れればと考えている。

＜主な質疑内容＞
Ｑ　最初にフリースペースができた経緯は。

Ａ　市民会議の中で、庁舎内に市民が集まれる場所があったらいいという意見が出たことから設置した。

Ｑ　宮代町には公民館はいくつあるのか。

Ａ　教育委員会で貸し館として３つあるだけである。宮代には、元々、地域で自分達でやれるコミュニティを大事にしてもらいたいというコンセプトがあった。そのため、地域の中で集まれる場所を大切にしてきたため、集会所はたくさんあるが、公民館はあまり作ってこなかった。

Ｑ　社協との関わりはどうか。

Ａ　サポートセンターとして社協と一緒に何かということはない。

　ＮＰＯとしては、社協と一緒に子育てサロンという事業を実施している。

Ｑ　人が大事だと感じた。

Ａ　人と人が繋がるのが大事だと感じている。

　サポートセンターのオープニングに合わせて、はらっパーク宮代という公園が一緒に指定管理を開始した。その際、別々にセレモニーをするより一緒に何かをしたほうがより盛りあがるのではと考え、宮代町内の全指定管理施設に声を掛け、スタンプラリーを実施した。サポートセンターは情報発信が強みだが、場所がないという弱みがある。逆に場所に強みを持っている団体もあり、繋がることにより、やりたいことを一緒に出来ることに気付いた。スタンプラリーを通じていい関係が築け、今後イベント等がある際には出展等により一緒に町を盛り上げていこうということにもなり、繋がりは大事だと感じた。

Ｑ　サポートセンタースタッフの給料はどう払っているのか。

Ａ　町が指定管理料を払っているので、そこから支払っている。

Ｑ　コピーが１０円となっているが、用紙を持ち込んでの料金か。

Ａ　用紙代込みである。コピー機の他に輪転機があり、そちらは用紙を持ち込んでの使用となっている。

Ｑ　サポートセンターは、幼児から高齢者までの市民活動家の場ということでいいか。

Ａ　活動する場所は公民館や総合運動公園、ふれあいセンター、進修館等と人口規模に対しては多くある。しかしそういった施設は使ったら終わりである。サポートセンターはそういった場所を利用している人達が集まって、繋がって、更に違うことを生んでいくことを期待している施設である。

Ｑ　従来から登録していた団体を、サポートセンターが出来たことによって再登録させる必要があったのはなぜか。事務的な話なのか、活動を明確化するためなのか。

Ａ　両方である。

Ｑ　市民活動している人は、元々いる人が多いのか。転入者が多いのか。

Ａ　どちらが多いのかは分からないが、年齢的にはシニア世代が多い。

Ｑ　子育て中の母親も活動している人や、活動したい意欲がある人が大勢いるように感じた。

Ａ　子育て世代の市民活動団体は少ないが、それは、町の子育てへのサポートが手厚いため、サークルを作る必要性を感じないからである。

子育て世代が活動しやすい環境を作ると、市民活動も増えると考えている。

Q　宮代町は転入者が多く、活躍しているのも転入者が多いように感じた。

A　宮代のよさに気付いた人が転入してきて、宮代のよさを発信してくれている。

Q　個人登録も可能とのことだが、個人登録者はどの程度いるのか。また、個人登録者をどうサポートしているのか。

A　個人登録の場合は「やりたいゾゥ」という登録制度がある。登録時には面談によりやりたいことを聞き取り、ホームページに情報を載せている。また、登録者同士の横の繋がりを作るため、土曜日に「やりたいゾゥカフェ」として、登録者の懇親会を開いた。何かをしたい人達の集まりなので、話が大変盛りあがった。

やる気がある人たちなので、繋がるきっかけを作るだけで、どんどん活動が広がっていく。サポートセンターの仕事としては、場所の確保等だけである。

Q　サポートセンターの仕組みは誰が作ったのか。杉戸町で勉強してきたのか。

A　出来た当初は、オープンスペースで市民活動には遠いイメージが何年も続いた。それでは目的が違うということで、杉戸のＮＰＯ法人に「新しい宮代の受け皿を育てた上で、２年間で立て替えてほしい」と業務委託をしたところ、宮代の市民活動している人達が集まり今の仕組みができた。

Q　杉戸町の人達はなぜそういうことができるのか。

A　関わった人達のスキルが高かったからである。

Q　行政が主導したのではないということか。

A　ない。

Q　杉戸町にも同じ様な仕組みがあるのか。

A　ない。

Q　団体が登録しやすいようにするために気をつけていることや、心掛けていることは何かあるか。

A　元々登録していた団体が再登録する際は書類に記入時に、カウンターに来てもらい、コミュニケーションをとりながら記入してもらう。その際に、団体が何をしたいのか聞きだすようにしている。ただ、今になっては、団体に書いてもらうのではなく、インタビューシートにすればと反省はしている。

フリースペースに来て活動している団体には、帰りの際に声掛けをして、登録シートを渡すようにしている。

とにかく日頃から声を掛けることを心掛けている。

Q　行政が登録団体と一緒に事業をやりたいと考えたとき、仲介役もセンターでやっているのか。

A　直接行政と話す団体もあるが、今後はそういった仲介役もできればと考えている。

Q　どういった事業がある。

A　これから始まる事業で、観光ツアーで登録団体のスキルを使うことを考えている。

Q　団体間で自然に一緒に何かやろうという動きはあるか。

A　各団体が看板を出してはいるが、そのままだと特に動きはなく、声掛けをすると動き出す。

Ｑ　ホームページを見ない人にはどういう周知をしている。
Ａ　町の広報誌に市民活動を紹介するコーナーを作ってもらい、記事を載せてもらっている。あと、サポートセンターの通信を年４回ほど出し、周知をしようと考えている。
Ｑ　現在の登録団体数はいくつか。
Ａ　４５団体である。
Ｑ　どういう活動目的の団体が多いか。
Ａ　ＮＰＯであれば分かるが、それ以外では、グランドゴルフを始めとした、趣味の団体がほとんどである。ただ、グランドゴルフ等でも、その楽しみを広く伝えるためにアクションをおこすという前提で登録してもらっている。また、自治会も他との連携を考えるということで登録している。
Ｑ　体育協会等に登録している団体も登録しているのか。
Ａ　そのとおりである。
「自分達の活動のＰＲの場としてチラシを置けるから」、「打ち合わせの場所としてスペース予約ができるから」という理由で登録している団体が多い。

午後２時～１６時
●幸手市　介護予防型コミュニケーション喫茶「元気スタンド・ぷリズム」
元気スタンド・ぷリズムにて
元気スタンド・ぷリズム合同会社　小泉圭司氏
創業から普段の活動、今後の構想等について説明を受けた後、店内を視察。
概要については、次のとおり。
・会社員時代、高齢者から居場所がなくなってきているという話を聞き、地域に居場所を作りたいと思ったのがきっかけである。
・要介護状態以外の人達に気軽に介護予防（押し付けない介護予防）をしてもらい、社会保障費増大の抑制になればと考えている。
・更に１店舗隣の空き店舗を活用した、「元気スタンドコミュニティモール構想」を持っている。

＜主な質疑内容＞
Ｑ　次々に案がでてくるが、案はどうやって出てくるのか。
Ａ　お客と話しをしている中で、困りごとの話が出て、その解決策を探っているうちにいろいろな案となる。
Ｑ　やる気の源は何か。
Ａ　今、やっておかないと、という使命感からである。
Ｑ　苦と感じたことはないか。
Ａ　おじいちゃん、おばあちゃんに育ててもらい、恩返しをしたいと思っているので、苦にはならない。
Ｑ　コミュニティカフェと通常のカフェの違いは何か。
Ａ　毎日営業していると通常のカフェと変わらないとみなされ、検討の補助金対象外と

なってしまう。

Ｑ　事業を始める際に参考にしたＮＰＯ等はあるか。

Ａ　多摩ニュータウンの「福祉亭」や越谷市の子育て支援団体「ほっと越谷」である。

午後４時～

●意見交換会　バス車中にて

・今後、自分はどう関わり、どんな行動をとっていくか考えたが何も考え付かない。しかし、これからいろいろと話を聞き、刺激を受け、ヒントを得ながら、少しでも役に立ちたいと思っている。

・幸手のコミュニティカフェは、立ち上げて継続していくことは大変なことであり、世の中のため、高齢者のため、いろいろなことを噛み合わせながら行っている心構えは我々では到底考えられない。外的な要因に左右されるため、１０年後にどうなっているか想像できず、とても真似できない。今後どうしたいかは、宮代町の活動を市民活動の参考として、地域支援、高齢者支援、福祉の励ましとなるような活動ができればと思う。

・宮代町でやっているスペース作りは行田にも必要と感じた。今後、自分が何をするかということについては、幸手の押し付けない高齢者介護というコンセプトに共感できたが、宮代町のような公的スペースでやれればと思った。しかしその場合、いろいろな制約が出てきて自分がやりたいようにやれないと思う。自分の活動の交流、広報の部分では、宮代町でやっていたことが必要と感じた。コミュニティスペース作りを行田がやっていくのであれば協力したい。登録団体が作品等を発表できる場も必要と感じた。

・アイデア出しが大切と感じた。今後は、幸手の事例を活かしていきたいと思う。

・まちづくりは人づくりであると感じた。関わっている人のキャラクターの素晴らしさが印象的だった。マーケティングセンス、気付きの力が素晴らしく、自分もアンテナの感度を上げなければと思った。今後は、情熱に加え客観的な調査分析を進め、より有効な手法を考えて取り組んでいきたい。また、行田市は基礎データが不足気味なため、市民活動の一環としてデータを取っていく必要があると思う。

・宮代も、幸手も、若いやる気のあるリーダーにめぐり合えたのが成功の要因だと思う。幸手のカフェでメニューの中にいろいろな情報を載せるやり方は、行田の店舗でも取り入れてみていいのではないかと感じた。今後については、今日、見聞きしたことを地元に戻って活かせればいいと感じた。

・宮代は、行政が勉強し、いい団体に指定管理を任せたことから、うまく活動し、うまく廻ってると感じた。団体を横に繋げるのも、繋げる役割が重要だと思った。幸手は、個人での運営の継続を支えられる仕組みがあればと感じた。

・自分達の活動に言い訳がないことに感心し、自分が何を出来るのか考え直す必要があると感じた。今後は、５年後、１０年後のみずしろのあり方について検討していければと思う。

・人との繋がりに熱意を持っている。自分のためではなく、人のために活動しているということが、まさに公益だと感じた。常に前向きに活動しているところは学ぶべきところだと思う。今後は、人と人、活動と活動を繋ぎ、それを地域活動に繋げられればと思う。
・皆さんが意見交換や視察先で話を聞いている中で、何が取り入れられるのか考えたり、行田には何が必要なのかを真剣に考えていることが、とても心強く感じられた。今後は市民と一緒にやっていこうというスタンスの中で、皆さんの意見等を形にして、施策の中での合意形成を図っていければと思う。
・旗振り役が重要。そういうが人がどんどん出てくるのが好ましい。
・人を相手にするとぶつかったりして大変ではあるが、やりがいがある仕事である。
・コミセンの使われ方を委員会で検討し、市に提言するのもよいのではないか。
・ＮＰＯ団体等の代表を集め、煮詰まっている点、解決できない点、手助けしてほしい点等を出し合ってもらい、その解決の糸口を委員会で見出すというのはどうか。
・登録団体が利用できるようなＢＯＸを人が集まりやすい場所に置くのはどうか。
・コミセンの中の囲碁将棋のスペースはいいと思うが、発展性がない。
・コミセンで、時間潰しをするだけでなく、水城公園の草むしりをしたり、子どもに声掛けをしたりと、何らかの発展性があればいいと思う。